

第42回日本毒性学会学術年会 研究発表のご案内

<口演発表>

セッション 3 6 月 29 日(月) 13:48 - 13:54 第 6 会場

演題番号: P-28 (当社研修生による 所属:東京農工大学、岐阜大学大学院) ○阿部 一

演 題 名: 幼若ラットを用いた経皮毒性試験の検討 髄鞘傷害物質クプリゾンのラットへの発達期暴露による
脳部位での網羅的遺伝子発現解析を用いたニューロン・グリア発達障害指標の検出

概 要:

化学物質の発達神経毒性試験は、多くの時間と動物を必要とする大規模な試験であり、より小規模かつ迅速なスクリーニング評価システムの構築が求められています。今回、発達神経毒性の簡便かつ効率的な検出法の確立を目指し、成獣動物への暴露により髄鞘傷害を惹起するクプリゾンを妊娠・授乳期のラットに投与し、その児動物の脳を用いたマイクロアレイ解析によりニューロン新生・グリア新生障害に関連する遺伝子発現プロファイルを獲得しましたので報告いたします。

※上記発表は優秀研究発表(ポスター 6 月 29 日(月) 16:45 - 17:45 ポスター展示会場)にも含まれております。

ポスター 6 月 30 日(火) 16:30 - 17:30 ポスター展示会場

皮膚

演題番号: P-136 ○日向野 蔵人

演 題 名: 幼若ラットを用いた経皮毒性試験の検討

概 要:

幼若動物を用いた毒性試験は、成獣動物と比較した場合の毒性発現の強弱や、器官・機能の発達への影響を調べることができる評価系として有用です。また、近年では、患者さんへの負担軽減や投与中断が容易という利点から、経皮投与の医薬品開発も行われています。一方、経皮投与では塗布面積が投与量の制限要素となります。そこで今回、幼若ラットを用いた場合の経皮投与可能な面積について検討を行いましたので報告いたします。

感覚器

演題番号: P-139 ○嶋本 敬介 (当社含む 1 社 1 機関*による共同研究)

演 題 名: 無眼球症スナネズミの聴性脳幹反応検査

概 要:

スナネズミ(Meriones unguiculatus)は、日本で実験動物化された数少ない動物のひとつであり、脳・神経系の研究に用いられる他、老年性、騒音性及び伝音性難聴の研究に用いられております。今回無眼球症が疑われたスナネズミについて、聴性脳幹反応(Auditory Brainstem Response)を検査し、さらに聴覚器の病理組織学的検査を実施したので報告いたします。

* (株)ボゾリサーチセンター、国立医薬品食品衛生研究所

一般毒性

演題番号: P-151 ○西原 義人

演 題 名: 毒性試験におけるラットの血液凝固検査(I) -背景データの検討-

概 要:

ラット毒性試験における血液凝固検査値は、実験操作等の条件により変動し易い印象があります。今回、我々は 2009 年から 2014 年に(株)ボゾリサーチセンターで実施されたラットの毒性試験から同一の機器及び測定試薬により得られた血液凝固検査データを用い、性、系統、週齢、絶食や投与経路の違いによる差異を検討しましたのでご報告いたします。

演題番号: P-152 ○満元 達也

演題名: 毒性試験におけるラットの血液凝固検査(Ⅱ) -絶食の影響-

概要:

血液凝固系の重要な因子であるビタミンKは、その生物活性を発現する肝組織において、雌ラットの方が雄より高いことが知られております。今回、雌雄のラット(SDラット10及び19週齢並びにWistarラット10週齢)について、絶食及び非絶食下でビタミンK依存性凝固因子を含む血液凝固検査を実施し、食餌条件の違いが血液凝固時間へ及ぼす影響について検討しましたので報告いたします。

ポスター 7月1日(水) 13:30 - 14:30 ポスター展示会場

モデル動物

演題番号: P-249 ○金光 弘幸 (当社含む1社1機関*による共同研究)

演題名: NOGマウスにおける背景データ(1)

概要:

T、B及びNK細胞の欠損等の重度な複合型免疫不全形質を呈するNOGマウスは、従来のヌードマウスやSCIDマウスと比べて、ヒトの組織や細胞の生着性が非常に高く、今後、再生医療等製品の安全性に関する非臨床試験や造腫瘍性試験等と言った広い分野での需要が見込まれています。このような状況から、本学会ではNOGマウスの臨床検査や病理学検査等の背景データについて報告いたします。

* (株)ボゾリサーチセンター、公益財団法人 実験動物中央研究所

代替法

演題番号: P-254 ○増淵 康哲

演題名: rasH2マウスの短期(26週間)がん原性試験における背景データについて(3)

概要:

第38回(2011年)及び第40回日本毒性学会学術年会(2013年)で報告した4ロット分(雌雄各200匹)に加え、2ロット分(雌雄各100匹)の背景データを取得したので報告いたします。結果として、全6ロット分(雌雄各300匹)の自然発生性腫瘍の発現頻度はこれまで報告されている文献と大差ありませんでした。また、発がん陽性対照群(MNU単回投与)の発がん感受性は6ロットとも良好でした。

(以上、全て筆頭発表者のみ掲載)

※この他、当社も参画しました眼刺激性試験代替法 Vitrigel-EIT のバリデーション研究に関する口演発表(O-32)も予定されております。